

# ヒラメ

*Paralichthys olivaceus*

地方名  
あおば、てっくい



## 生態

- ①寿命：オス 10 年以上、メス 20 年以上
- ②成熟：オス 2 歳以上、メス 3 歳以上
- ③産卵期：5 月～7 月
- ④産卵場：水深 30m 以浅の粗砂及び砂礫地帯
- ⑤分布：千島列島から九州、東シナ海に分布
- ⑥生態：産卵後 1～2 日でふ化し、約 1 ヶ月間の浮遊期間の後に水深 10m 以浅の砂または砂泥域に着底し、成長に伴い深所へ移動する。生息域は水深 100m 以浅の海域。季節的に深浅移動する。稚魚はアミ類を主に摂餌し、成長とともに魚類、イカ類を捕食する。

## 主な漁業

ヒラメはほぼ周年にわたって県内全域で漁獲される。日本海から津軽海峡西部にかけては 5 月～7 月に底建網・一本釣で、陸奥湾から太平洋北部にかけては 5 月～7 月及び 11 月～翌年 1 月に定置網・底建網・さし網で、太平洋南部では 9 月～10 月にさし網で、11 月～翌年 5 月に小型底びき網で漁獲される。1～2 歳から漁獲される。

## 資源の動向と水準

日本海-陸奥湾海域の資源尾数は平成 18 年漁期\*に 1,262 千尾と平成 5 年漁期以降最高となったが、翌平成 19 年漁期に減少、以降は横ばいで、平成 28 年漁期は 823 千尾であった。津軽海峡東部-太平洋海域の資源尾数は、平成 17 年漁期に増加して以降横ばい傾向で、平成 28 年漁期は 2,777 千尾であった。

平成 30 年の資源動向は、コホート解析により推定した資源量の直近 5 年間の傾きから横ばいと判断した。平成 30 年の資源水準は、長期間データを有する漁獲量を判断材料とし、その最高値と最低値との間を 3 等分し、上から高位、中位、低位とすると、中位であった。

\*漁期：当年 7 月から翌年 6 月までを当年の漁期とした。

\*日本海-陸奥湾海域：大間越漁協から小泊漁協に、津軽海峡西部の竜飛今別漁協、三厩漁協、陸奥湾の外ヶ浜漁協から脇野沢村漁協を含むものとした。

\*津軽海峡東部-太平洋海域：階上漁協から尻屋漁協に、津軽海峡東部の佐井村漁協から岩屋漁協を含むものとした。

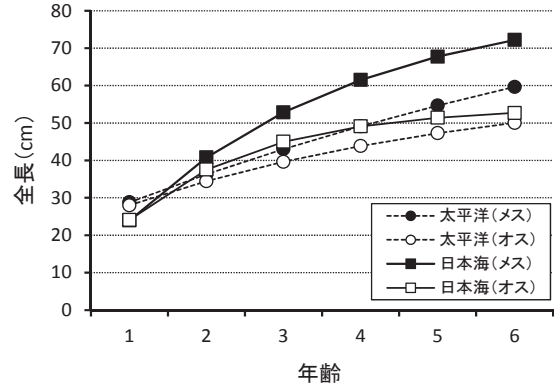


図 青森県におけるヒラメの成長

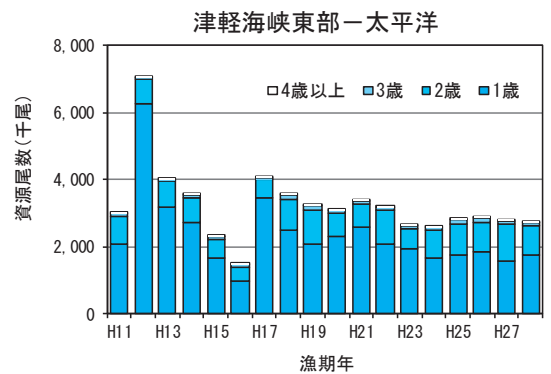
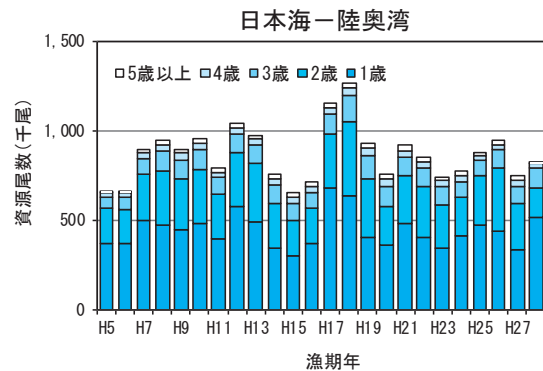
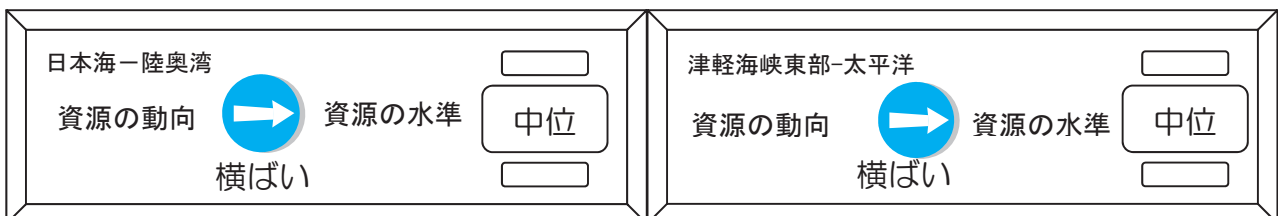


図 各海域の年齢別資源尾数の推移 (上図：日本海-陸奥湾、下図：津軽海峡東部-太平洋)



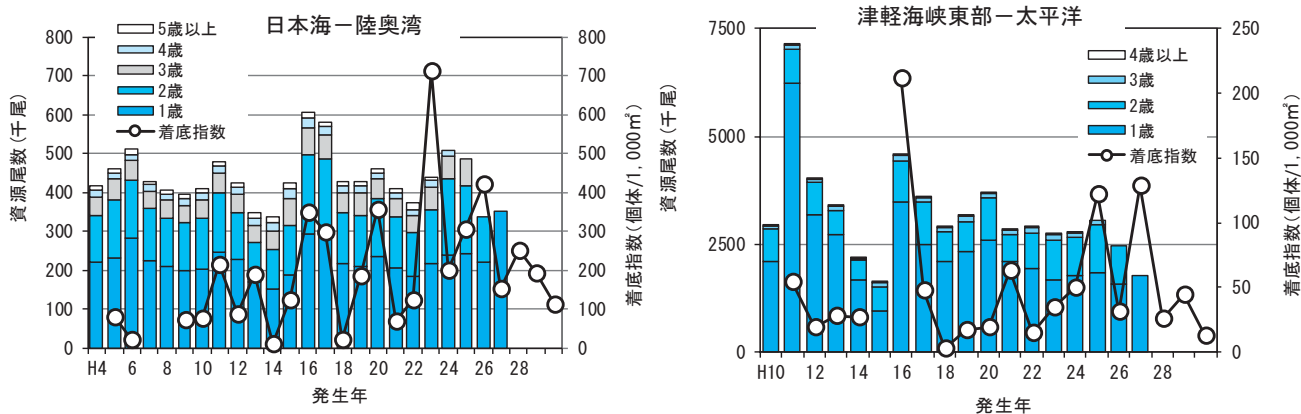


図 発生年別ヒラメの年齢別資源尾数と着底指数の推移（左：日本海-陸奥湾、右：津軽海峡東部-太平洋）

（日本海ヒラメ稚魚発生量）

平成 30 年のヒラメ稚魚の着底指数は 112 で、昭和 55 年以降の平均値 149 を下回る水準であった。

\*着底指数：発生量の指標値。つがる市沖で夏期に着底稚魚調査を実施。水深別の平均分布密度（個体/1,000m<sup>2</sup>）の年最高値。

（太平洋ヒラメ稚魚発生量）

平成 30 年のヒラメの着底指数は 12 で、平成 11 年以降の平均値 50 を下回り、過去 2 番目に低い水準であった。

\*着底指数：発生量の指標値。三沢市沖で夏期に着底稚魚調査を実施。水深別の平均分布密度（個体/1,000m<sup>2</sup>）の年最高値。

海域別漁獲量及び漁獲金額

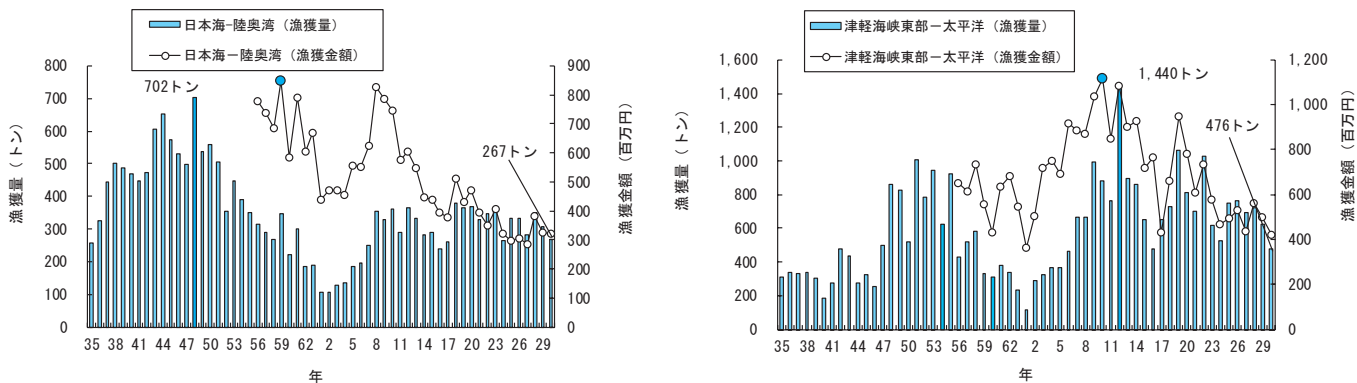


図 青森県におけるヒラメの海域別漁獲量及び漁獲金額の推移

資源を上手に利用するために

○ひらめ資源管理指針（平成 2 年 3 月）、資源管理計画（日本海：平成 6 年 3 月、太平洋：平成 8 年 3 月）  
 ・全長35cm未満個体の再放流の他、さし網についてはひらめ網の目合制限（6.0寸以上）、三枚網の禁止、留網の禁止などを定めている。

○青森県太平洋海域ヒラメ資源回復計画（平成 20 年 3 月）  
 ・小型ヒラメの保護を推進するため、さし網漁業では 9～12 月の水深 10m 以浅の区域、小型機船底びき網漁業は北緯 41 度以南の水深 100m 以浅の区域におけるヒラメを目的とした操業の自粛を定めている。

☆上記の取組を継続することが必要である。

トピックス

- ・昭和 62 年に「県の魚」に制定される。
- ・平成 2 年以降、年間 200 万尾の計画で種苗放流が行われており、平成 30 年の放流尾数は 101 万尾。